

新國怡郡三雲村古器圖說

全

筑前國怡土郡三雲村所堀出古器圖考

福岡 青柳種信著

文政五年壬午二月二日本州怡土郡三雲村の農長清四郎の宅に南隣より南跡より農長抱の圃より掘り出
せり土井と築むと地を掘り三尺餘あり一銅劍と
する鋒とあり地中に植へばその又其側より一銅
鉾とあり其形狀偏りて板の如く其口より壺一口より土
器より鉄薬を用て焼く物にはれん覆ひて送る地中の土
肉は土と填るものあり其口より掘りて大甕

二口その口とはまを合せし横臥しその其角は必人の尻と
しやまきとて衆人をして懼るゝと云りて堀よきや免て
其件のもを以て郡廳に訴へく其下なる甕や堀等々
よりなるやぐ堀よきれを甕徑二尺許に三尺余
二つとたゆり程なり甕の腹と市二尺ありて縄繋ぐ
き搦^{カマヘ}と云りて甕^{スヤキ}素焼物其中に古鏡大十三五
面銅銚大小二口勾玉一管玉一つ玉六つは皆揃て
質は唐よりて多かるかゞとて碎けし甕や泥
の如し其角二つ金の有り形はいと矮小に紛紅色なり

筑前國怡土郡三雲村古器圖說

近き所む。當其祭奠の盛なり。時の所當地なる
なりといふ人もある。と云ふは、いひ難くも葬
果と云ふ方近きむ。要する棺に鏡を懸るなり。なり
怡土國王の名なり。彼國の史藉より、これを云ふ。西土と通
し。稍かの風俗は、おひくせり。も知く。るべし。と云ふ
物。と云ふ。要の器なり。皇國古物なり。是を以て推分
い。よ。葬果なり。と云ふ。近き。明の瑛仁宝と云ふあり。
七修續纂と云ふ。其語曰。世之古鏡多出北地。古墓人知
而寶之。未知墓出故也。按漢書。霍光傳。光之喪。賜東園溫明。

服虔注以東園出鏡之所予恐溫明鏡名也又按癸辛雜識云世
大缺後用鏡懸棺蓋以照屍取光明破暗之義據此二書則知鏡
在於墓其來已遠而取義亦明白也意其開一墓而得鏡不一似
古人送葬者皆贈之如今人之錦箱耳と有り此説よくある

劍一口 長一尺七寸この内
又長一尺一寸柄五寸 銅製にー又柄もに鑄造と有り 又巾
一寸五分

身と雙樋と 樋長二寸
五分 雙樋の中一三稜有り竹の節也又二處と

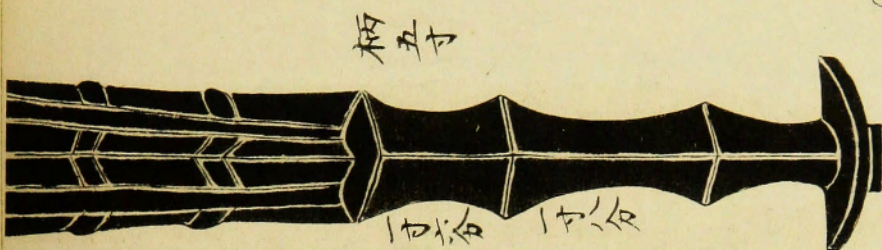
柄も一三稜有り竹の節也又二處有り捉掬ニギル便寸柄の頭

小蓋のやわ物有り柄も貫る形を據て紫花巧妙之色漆を
潤澤有り又日土蝕一處有りて傷を新と鑄造するが如く

議
銅劔

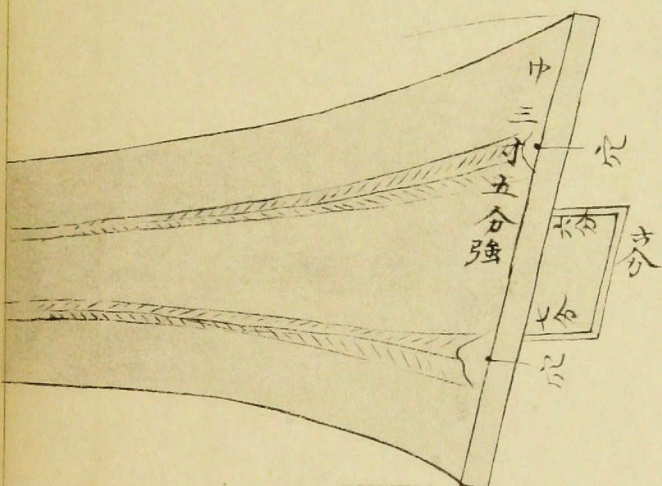
黒紫
色

中々た



銅鉞

青緑
色

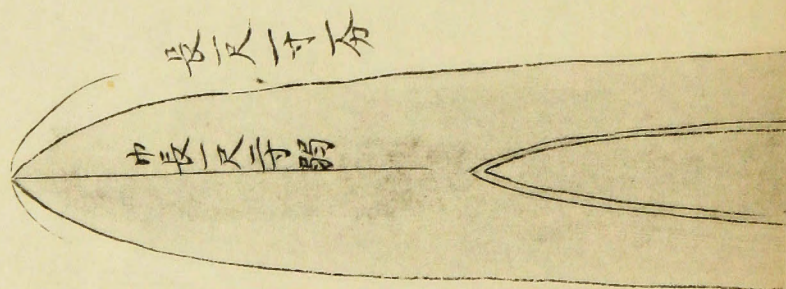




長一尺七寸

鋒一尺二寸

中一寸三分



長一尺七寸

中一寸三分

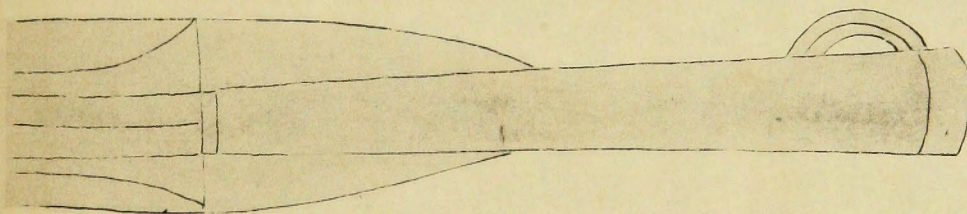
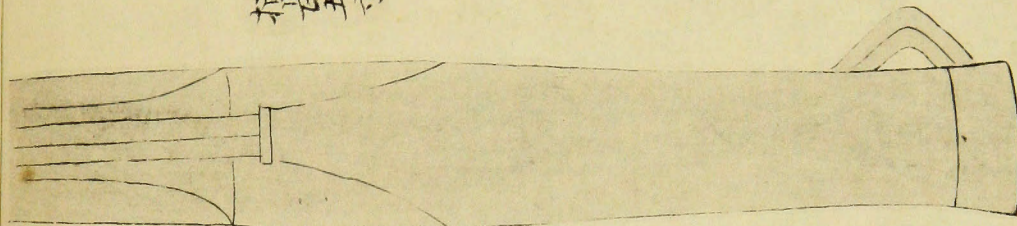
輟耕錄云官游紀聞云古銅器者新古論辨古器則有謂
 歟識臘茶色朱砂陸真青綠井口之類臘茶色亦有差別三代
 及秦漢間器流傳世間歲月寢久其色微黃色而潤澤又曰
 器入土千年純青如鋪翠其色子後稍薄午後乘陰氣翠潤欲滴
 間有土蝕處或穿或剝並如螭篆自然或有斧痕則是偽也銅器墜
 水千年則純綠色而瑩如玉未及千年綠而不瑩傳世古則不曾
 入水土惟流傳人間色些褐而之乃以釵或土入土久一色也
 其色青綠或人乃流傳者其紫色光瑩何乃夢溪筆
 談云沉盧之類是鐵釵之類也古劍有沉盧魚腦之名謂其湛然黑色也云云

斯劍をのこ皇朝は物將漢製と知れりしかば皇朝のいへ刀
 剣を釘と云ふをも同く西土も宮廟乘輿の飾或ハ閑橋の閑物
 節鉞戈矛盾弩機或ハ鈴刀等の類に釘と云ふをとも見ゆとハてり
 淨物たるべし但や古を異國に製するひとも同くこれと云
 一と云ふべし那河郡五十川村の諸の神傳令く此物と思ふを
 ずと云ふ又次と見ゆる鋒をハあ市流布を近年太宰府の
 市に^{ホリ}鑄せりとの是と云ふ之傳と考ふるに神皇正統記に
 征^ハるる西の諸國に使驛を有とありと其より彼
 魏志に云ふ伊規國に有千餘戸世有王に郡使往來常所駐とあり

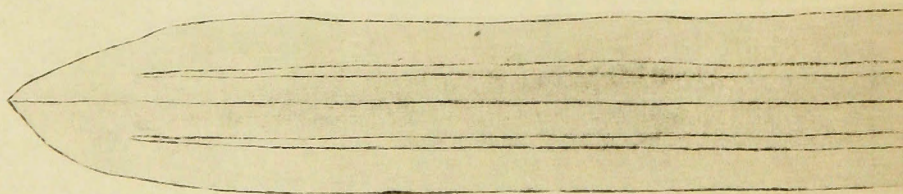
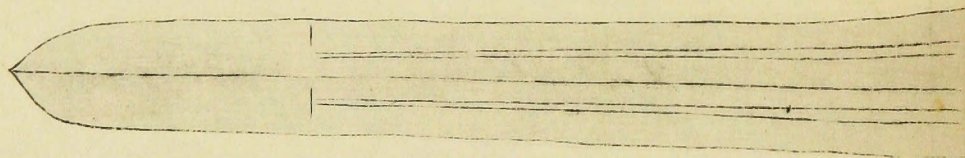
銅鉞

鈕

柄長五寸



鐏長一尺七寸 鋒長一尺三寸



け三雲井邊の石を即怡土縣主との三軒を將來に
 するもきくが

銅鐙二口後より石のハミ裂や果て即前圖の如き其状
 ち付の袋鍔と云ふもの如く稜レンギの根より莖有りて布衣座に
 口は横に切れる鋒ハ鯢尾に似たり稜の左方ハ雙樋を二つハ折
 三段と云ふ銅色青緑の入土千年純青如鋪翠と云ふといふは鐙
 の類ハ宮壽宮に在り住吉春日等當國の神社に神寶として扶桑畧記百
 練抄云々此の如く安樂寺の聖方侯と云ふ銅鐙と云ふなりと云ふ
 といふ天明四年より云ふなりといふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

ゆけりまうぐ

延壽と出雲道の歌
ゆけりまうぐ

又そに管玉といふもの

奇なる也

萬葉集
此条

竹玉といふもの

そは竹葉のやま

竹玉といふもの一皆古人の衣服の飾なりとの

王國御統玉といふ曲波といふもの

田中といふもの堀河より魏志と倭國使の彼國と齋河と

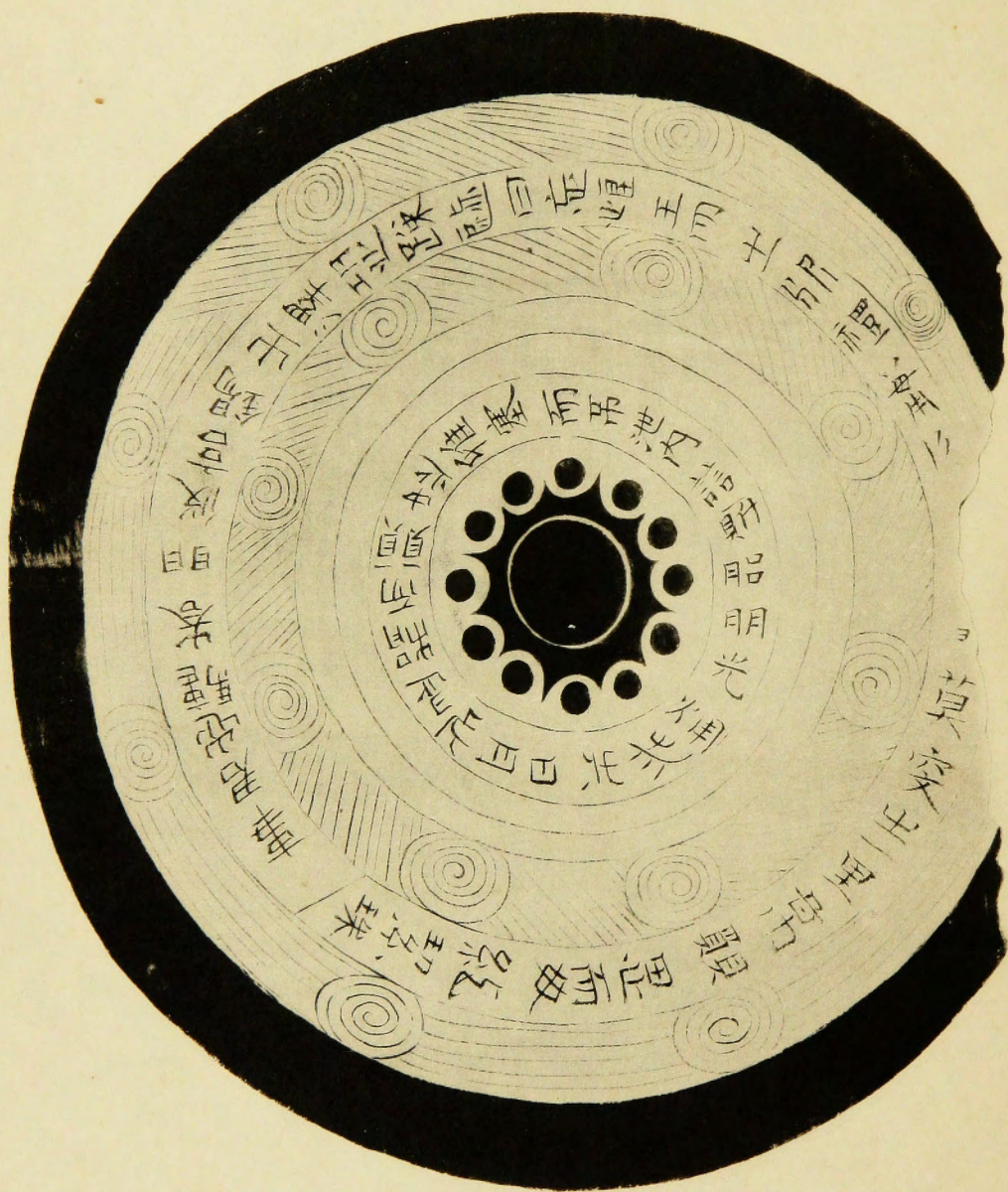
此中に白珠五千孔青太珠二枚有り皆上りり

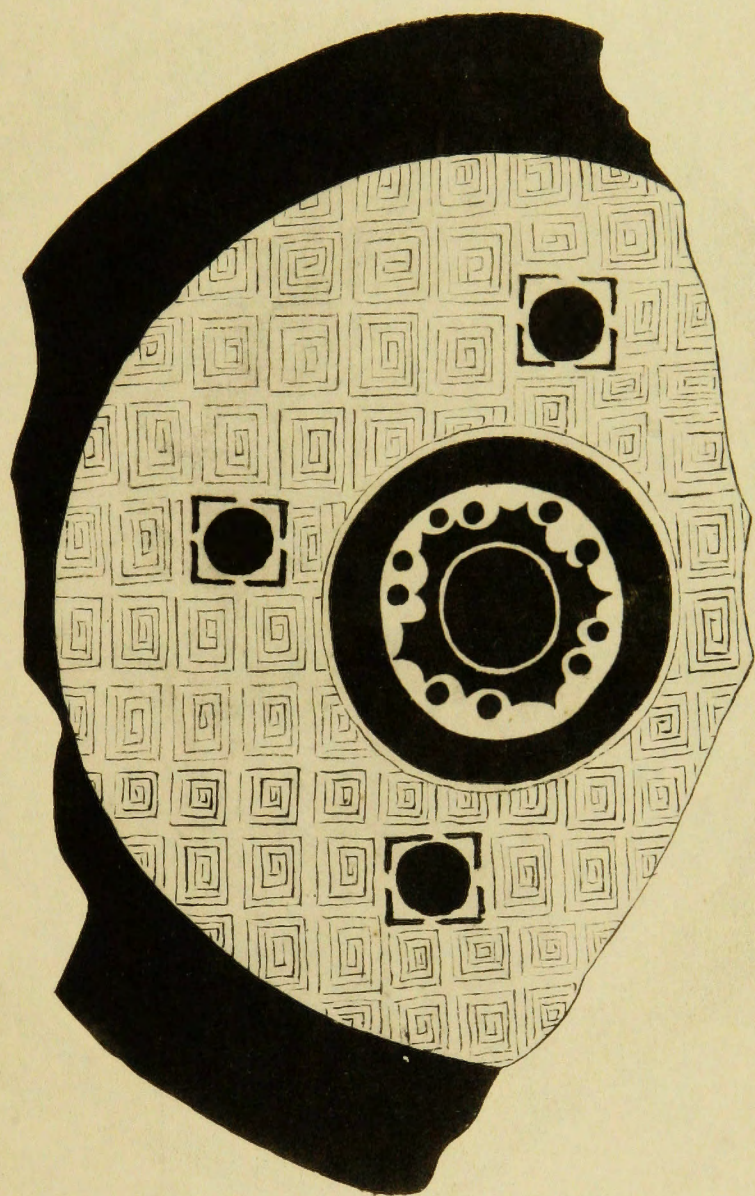
白銅鏡大小二十五面二の面大なるもの徑九寸背紋有 圓規三

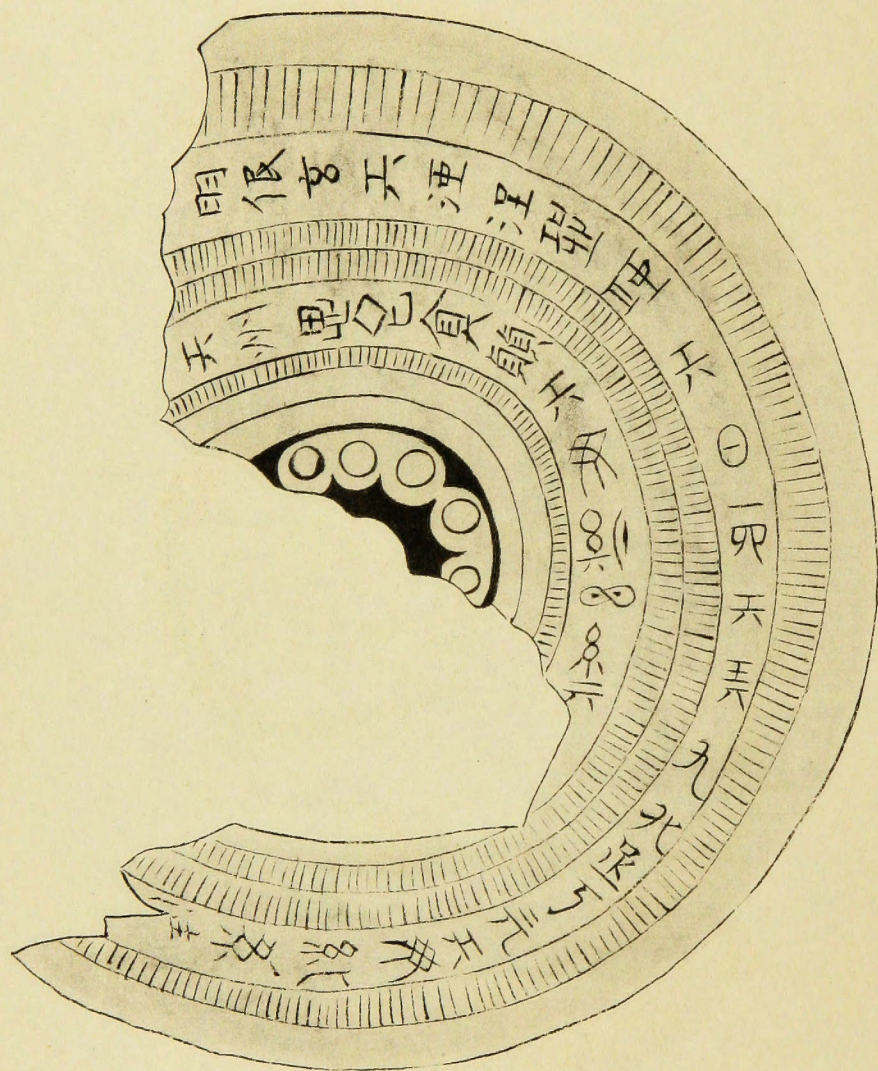
匝縁有 色青緑色と次ハ徑一寸三分こま縁有 背雪

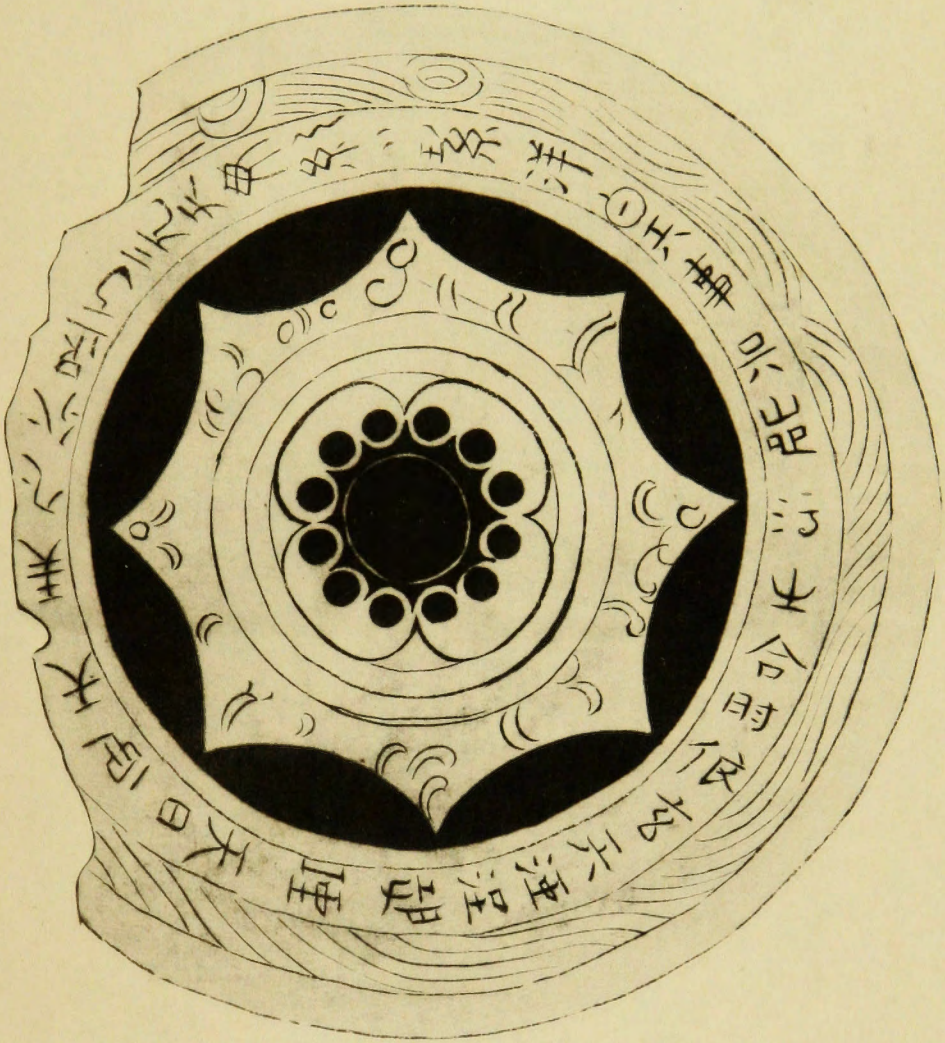
紋有り 中に乳紋のやま有り 乳品の市徑四 乳圓の

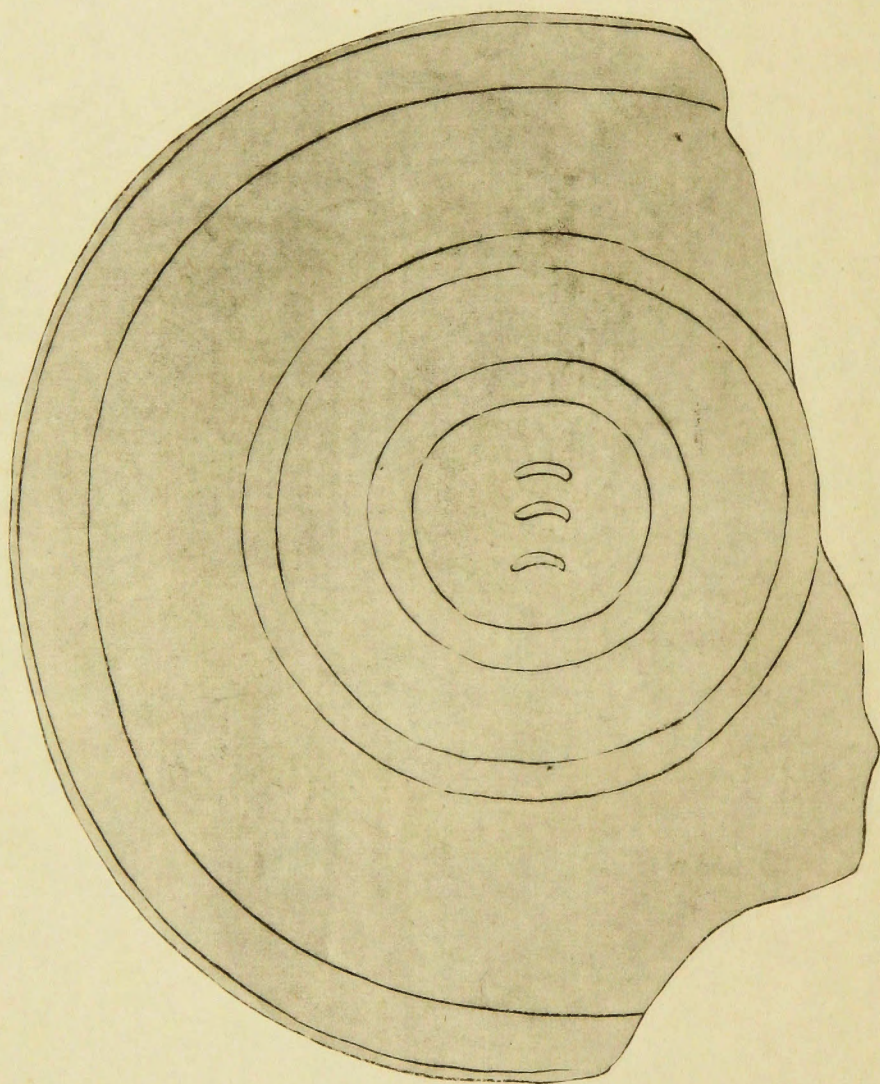
鏡







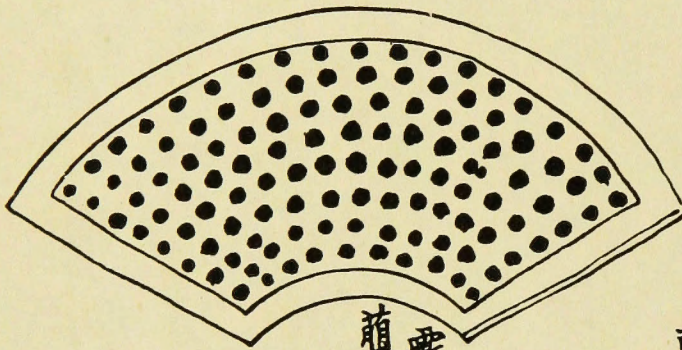




方座有り中臺ハ圓絡三匝ニ中に紐有り帛帯の如く紐の傍に星紋八ヶ有ハ星の如きハ華を蓋雲紋より青翠色傳ふるや
唐土ハ光瑩玉の如く又煙草の如きといふ上は巾指ハ圓圈七匝より一層を隔て改なりハ流水浪濁の如き者三ハ識りし隸書凡四十字ニ注成三分或ハ四分書體漢隸に古壯第四圖中云改作此所の如きを雷紋とす第五無紋なり
才六ハ無紋才七文字廿三字書體隸に此所の如き何れ其とも大いづれ出入あり此起之ハ八層を上るものと仰ぐ紐通ハ星十二ありてその乃字の如きハ巾指亦可愛也趙希鵠

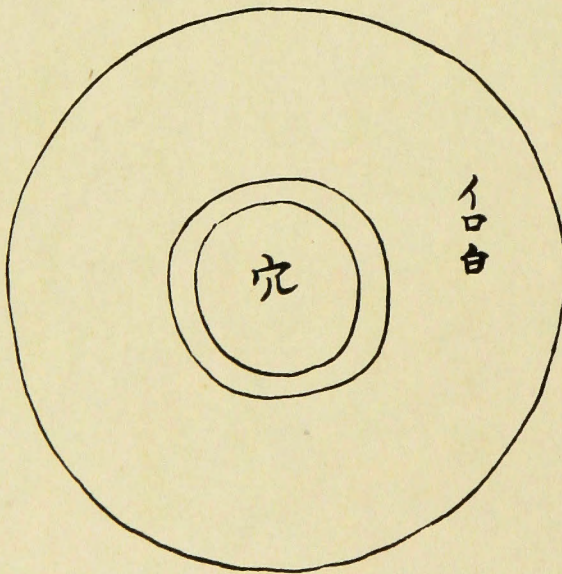
鏡の間とく、ふち敷く方より

素
破片



素
破片

裏
全図



台口

穴

洞天録云所謂識文款文亦不同識乃篆字以紀功漢以篆隸書
 といふは其の後の形に就ての事なるを師人の如うを疑ふべし
 官游純用之款と識との分を辨る所謂款識乃分二義款謂陰
 字是凹入者刻畫成之識謂陽字是提出者に如臨之と摹各
 自不同也又一面八徑五寸三分純綠色而瑩如玉とあるは
 其質極く滑るる銅なりを以て古人銅器の極を以て稱す
 奥の高よりを以て廿六七面はとあるは概上より續博
 物志云古先純銅作鏡者皆以錫雜之陶弘景曰李時珍云白銅出
 南以爐其石鍊テ為黃銅其色如金砥鍊テ為白銅雜錫テ為響銅又云

錫銅相和得^テ水^ヲ洗^ハ之極硬故鑄^ニ鏡^ヲ用之と云々瑩如玉元來
 磨鏡藥^{水銀と錫と和}と用と云々水^研土^ナ陶蒸せしむ久しと
 いふも光綵新し磨らるし背文重圈の中は文字極々篆體
 奇古不可讀才五圈の内に文字あり其特なり凡九圈中老
 れ紐形星紋あり其上に二重に識るもの計二洗の事を
 其餘は徑寸二面にあり其一面は五字四角四面同なり
 十四面都合三十面之は中に才二圈の内に雲紋のありて第一圈
 中に文字あり其書倭をよる一四字あり唯一二思ふものみ
 才五才五圈の内に棋^{カウジ}子^リ割^リの紋のありて八瓣をて内より

圓何^レ中^レ老^レ木瓜^ノ之^ノ内^ノ中^ノ以^テ紐^ヲ穿^テ之^ヲ。匣^ノ底^ニ紋^ニ。
上^ノの好^ク磨^リと^リ如^シ此^ノ鏡^ノ凡^サ二^面、^一つ^ハ光^ヲ瑩^ス如^シ玉^ノ、^一つ^ハ背^ノ面^ニ。
と^リに光^ヲ線^ヲ何^レ精^ニ巧^ニなり洞^ノ天^ノ録^ニ云^フ古^ノ人^ノ作^ル事^ヲ精^ニ緻^ニ工^ノ人^ノ預^ル民^ノ。
之^ノ列^ニ非^ス若^キ後^ニ世^ノ賤^ニ丈夫^ノ之^ノ事^ヲ故^ニ古^ノ器^ノ歟^ハ必^ズ細^ニ如^シ髮^ノ勻^ニ整^ニ分^ニ曉^ニ。
織^ノ毫^ノ摸^ル糊^ヲ誠^ニ文^ノ之^ノ畫^ノ宛^ニ如^シ仰^ル凡^サ而^{シテ}不^レ深^ニ峻^ニ大^ニ小^ニ淺^ニ深^ニ如^シ一^ニ亦^ハ明^ニ淨^ニ分^ニ曉^ニ。
無^ニ織^ノ毫^ノ摸^ル糊^ヲ此^ハ蓋^{シテ}用^フ銅^ノ之^ノ精^ニ者^ニ並^ニ無^ニ砂^ノ顆^ノ也^ニ良^ニ工^ノ精^ニ妙^ニ二^也不^レ各^ニ。
工^ノ夫^ノ非^ス一^ニ朝^ノ一^ニ夕^ノ所^ニ為^ス三^也と^リ。は^ハ鏡^ノの^ノこ^ノろ^ノを^ノ一^ニ恨^ミら^ニく^ニ塘^ノを^ノ。
一^ニ所^ニ未^レ鋤^ル辟^ル何^レ古^ノ傳^ノ片^ノと^リ。僅^ニ々^ニ金^ノ内^ニ二^三面^ノの^ノ或^ハ云^フ。
鐵^ノ網^ノ珊^ノ瑚^ノを^ノ漢^ノ用^フ小^ノ篆^ノ隸^ノ書^ヲ三^ニ國^ノ用^フ隸^ノ書^ヲと^リ。は^ハ既^ニ漢^ノ家^ノの^ノ如^シく

又隸書也。字に増減あり。畫に増減あり。又書云。道州民于秦
陵塚得古鏡。背有菱花。其鏡面背用水銀。即磨
鏡藥也。鏡色稍昏。而不黑。並青綠色。及剝蝕處。此乃西漢
時物。入土千年。其質並未變。此の鏡。近きと云ふ。景初
正始の物なり。吾州縣志云。此物なり。と。めき。果凡鑄成のものと
鋤撃するを破所多し。白銅をか破易し。此鏡の破所多き。所以
なり。と。この鏡。據り。予友西原貞樹云。柳川氏の屋。昔年に
戸に多く。宋板の三国志を見。魏志の倭傳に女王の請に因り
船三艘と鏡を積。既り。見。今世の三国志を。は。は。

忠いたす予古鏡とぬむ癖ありしや見えし古家とあるもの
十に七八と異邦のぬき神成るものなりし倭鏡なり世に法傳
ありて倭漢相傳なりし船三艘と鏡と積る皇朝運來
しもの必虚なりしと云ふに倭鏡の古鏡千尋の今なきもの
傳へくちや古昔怡土國王の使の傳へて來たり時彼を齋
米と誤りて昔年志賀島とを壻とせし倭國王の印
と相傳仲すと云ふなり

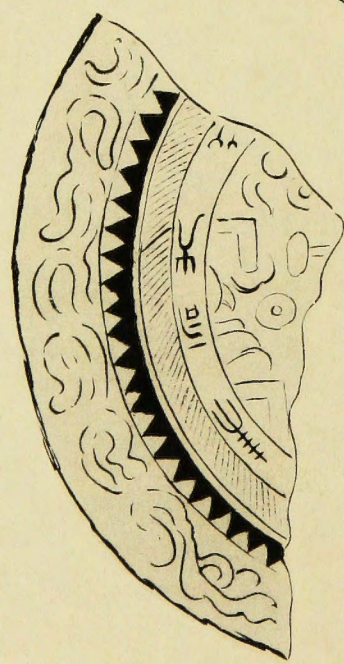
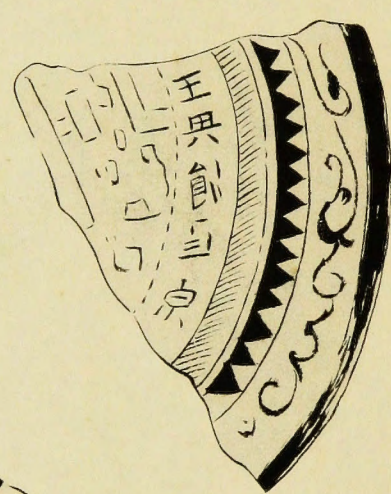
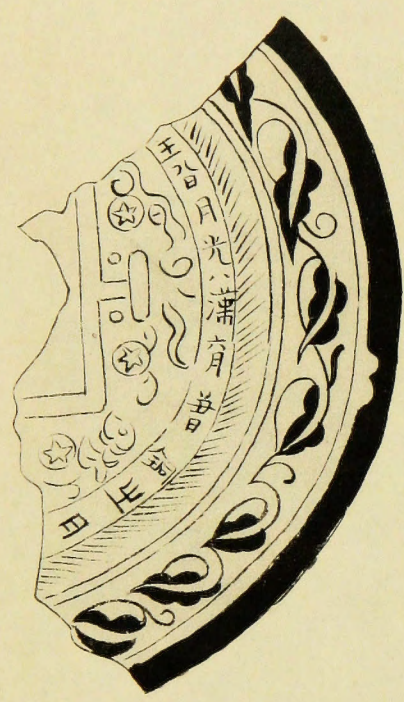
或云はぬは鏡の壻なりし時諸人駭き競あつたに
よゝはひと云ふ辭けし後片兩手に載る都に上

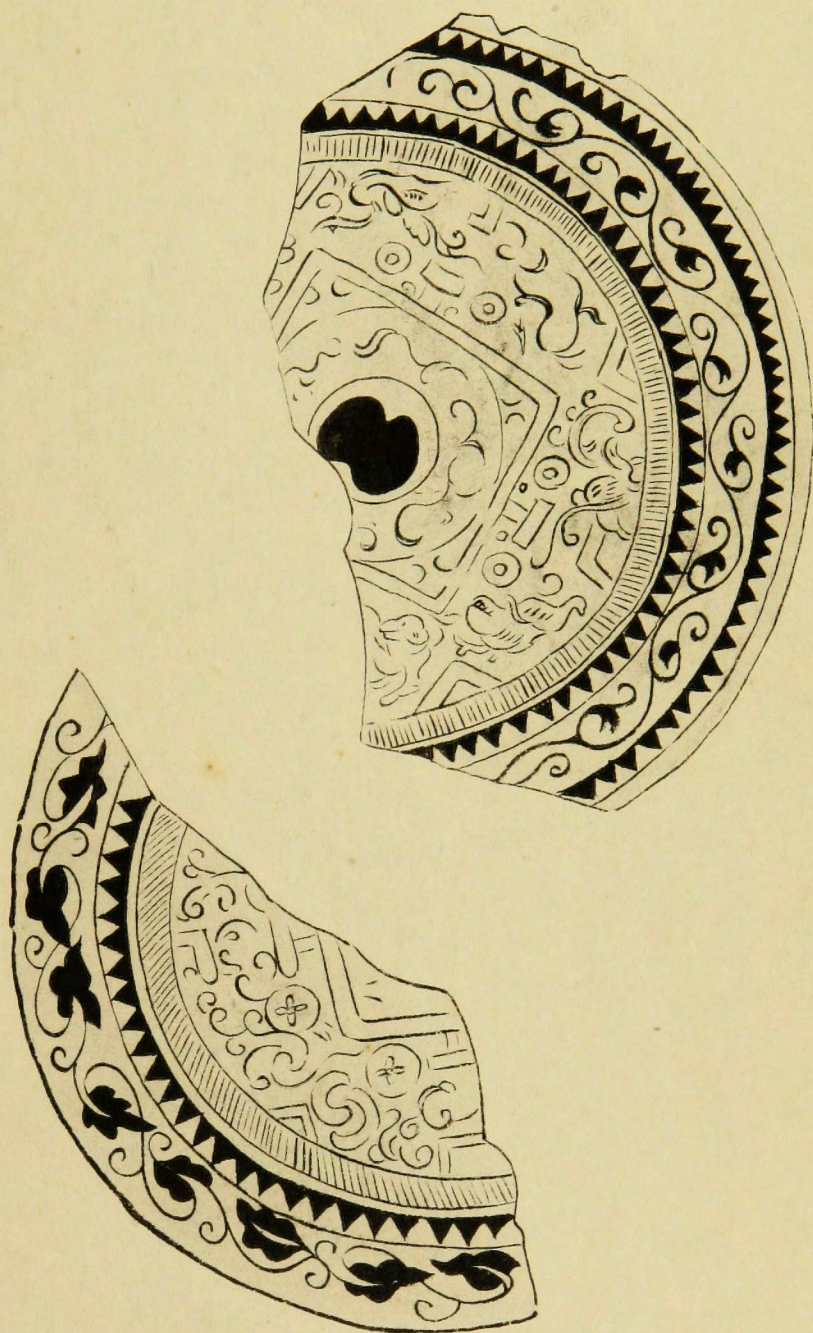
地を重し碎けりといふ土を煮て銅質柔輻
ありて碎易し静に煮上ぐば墨を漸く硬固くする
——といふ村民の法ありて終に鉄といふも若くは氣を
蒸陶せりて銅性の鉄に成る所のなる事なりぬ
今簡くするに——此を墨田と稱す家ののみ

これより先天明年中に三雲村の隣に井原村とありたり
古鏡を河内堀ありともいふ農民次第といひ者造溝ヤリミヅ三雲とも
といふ所を思ひやめりて其夏旱——と田ありてや——ハ
其溝の水を田に導んて捧ぎりて水口の寒うて穴開——り

田端の所を赤水流るる所なりて壙を掘りて一ケの重
い物なり其内古鏡數ナリ又鎧の板の如き物ナリ刀劔の
類ナリナリ朽損ニ状ナリバ鏡を破る者十斤と云ふ事あり
ハ金と云ふ事傍を以て之と云ふ者ども之に石など
——と云ふ其破片の如きもの精巧緻密なるをハキ
と云ふ事ナリナリ古物之背散れ細とハカニ其面を畫し似
と畫に如き文字の如き鳥獸の類ナリナリ或は或は耳目
口鼻何れも鬼形に似たり何れもハ蔓草の如き龍蛇の如き又
雲渦雷紋の如きものハ其の夢溪筆談に古銅器と論して

同郡井原村所掘出古鏡圖





同上未詳何器



黄同飛塵をいひけるものは是より又久しきものとぞ
黒くくまへは漆料し字形の上と同一其後ハ銅は
硝子紫黒色にしく光瑩をきり古物なるは三雲なる
くまを指しきりあるに同郡主船^{スセンジ}村の古家より芳
年古鏡なりやと案是ハこの鏡をきり稍大く鏡面凸と表
す疋紋蔓草雲渦乳文ハ井原村のくまに似たり紫黒色
なりと甚古致何をいひても世々を凸なりとせざる人
とせしきり予より黄同鏡面凸なれ人面ありと鏡を
置きし時とらる凸なれ人面ありと鏡中に食ひ移る

人面を食ふやうなるに収めぬ人爲とせしやうとて商人
も即ち考ふべきやうにやうなを拘束するやうに考へて
いざ商人の爲を同じふといふ様ありていざ商人の道
次第人の事を考へていざ商人の道次第に近づく
と考へていざ商人の道次第に近づく
其の爲に依りて其の道次第に近づく
其の説曰古人鑄鑑大則平鑑小則凸凡鑑窪則照人面大
凸則照人面小鑑不能全觀人面故今微凸於人面令小則
鑑雖小而能全納人面仍復量鑑之大小増損高下常令人

与鑑大小相若此工之巧智後人不能造比得古鑑皆刮磨令平
此師曠所以傷知音也と有り此鑑を明を

皇朝の古鏡ハ多クハ背ハ花鳥唐草其の形を画ク其形ハ葉
五葉三葉ナリトモハ葉を神代ハ鑑鏡といフ是ナリ
石鏡姥神の鏡ナリトモハ鑑鏡ナリハ葉六葉ナリトモ
七葉ナリトモ方鏡ナリトモ古鏡ナリトモハ湖州の識
ハ其の世阿多ク下品ナリ異國ナリトモ昔有人取亀甲銀河
始而造鏡其後以銅故鏡裏鑄亀甲也ト云々ハ其の世
龜甲ハ背ハつゞくと見ル皇朝の世中世の世ナリ紐ハ亀形

に造る糖をこの今の世も疎く疎く古也より拾遺あり
候かつすといふ所

かみいせりうううに杉のうへを疎らせ

ゆり

もいふうのむうにすむる川の上をいんぐらけ

て、埒に紋なきかみも、當国御笠郡竈門山神社、後三条院
の御時、筑前も藤原地、衡知は、雨のち、奉納、のち、鏡り、衆
徑一尺二寸二分無紋なり、今、神願、のち、雲の、のち、み、か
す、必、雨、降、る、其、神、祓、の、常、は、秘、く、中、次、新、續、古、今、集、り

瓶をもちて園へ行つた日といふ
面のかゝる曲のうたは
いそがしきに

前原市史

荷葉玲瓏

雨ふれ、のれをすくふ水鏡と云ふ也。此の鏡と云ふは即ちこの鏡なり。今もこれを水鏡と云ふ。

文政六年初秋